神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Verbalized silences : a history of Japanese Americans in Mitsuye Yamada's Camp Notes

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2007-11-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 篠田, 実紀, Shinoda, Miki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/608

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

言語化された沈黙

Mitsuye Yamada の *Camp Notes* が語る アメリカ合衆国の日系人の歴史

篠 田 実 紀

1923年生まれの日系アメリカ人女性詩人 Mitsuye Yamada は，世代的には Hisaye Yamamoto, Wakako Yamauchi, Yoshiko Uchida 等の女性作家と同様，日系2世として分類される。しかし，彼女の生地はアメリカではなく，日本の福岡県であるため，厳密には1世である。また，繊細な情景描写の背後に感情を潜伏させる傾向のある Yamamoto らとは異なり，フェミニスト的で反人種差別の姿勢を明確にすることをためらわない彼女の骨太の作風は，3世の活動家的であるとも指摘される（Yogi, 139)。

Yamada の主要作品は，*Camp Notes and Other Poems*（1976，以下 *Camp Notes*）と *Desert Run: Poems and Stories*（1988）という作品集に収録されている。これら2作品集の源泉は，太平洋戦争中，日系アメリカ人である彼女に課せられた収容（internment）という試練である。Washington 州 Seattle で育った彼女は，1942年，母と兄弟とともに Idaho 州 Minidoka の収容所（camp）へ送られ，2年間をここで過ごした。[1] 移民局の通訳だった父は，1941年にスパイ容疑で FBI に逮捕され，家族とは別に New Mexico 州にある司法省のキャンプに収容された。Susan Schweik は，第2次世界大戦とアメリカの女流詩人について論じた著書 *A Gulf So*

1　日系人の収容を指揮した War Relocation Authority（WRA）は，収容所を "relocation center" と呼んだが，日系人は "relocation camp" と呼び，その劣悪な環境から，"concentration camp" と呼ぶ者もいた。

Deeply Cut の中で，太平洋戦争中に収容体験を持つ日系人女性はアメリカ人女性の中で数少ない戦争の直接体験者（“authority of experience”）であると述べる（1991，174）。しかし，実際に自らの収容体験を活字にして発表する勇気のある日系人女性は多くない。後に有志が賠償運動（Redress Movement）を始めるまで，収容という事実は一般のアメリカ社会ではもちろんのこと，日系人の中にも忌わしい記憶として忘れようという風潮があった。そんな中で Yamada は，自ら収容の直接体験者として，1 世と 2 世たちが恥と感じて沈黙してしまいがちな収容とそれにまつわる日系アメリカ人の差別の歴史と向き合い，更にその過去を詩という形で未来の世代へと語りつごうと試みる。詩集 *Camp Notes* は，収容を中心とした戦時中の日系人の歴史の概略をたどりながら，歴史の表舞台には登場しない無名の人々の声にならない叫びを言語化する。

収容所を出たあと，Yamada は，自己と日系人全体の歴史を振り返ることに時間を費やした。この歴史探索作業の中で，彼女には，それまでの自分の体験において注意しなかったものに注意するようになった。彼女の作品は，過去には聞こえなかった音や耳をそむけていた音を聞き，見えなかった像や目をそむけていた像を見る勇気からつくり出されていったといってもよい。時間的距離をおいて自己の体験の全体像をより客観的に再認識することにより，時間的にも空間的にも体験の範囲外のより多くの人々に届くメッセージを生み出すことができた。更に，じっくりと自分自身と向き合い，仮面をはずした自己の identity を思いやったとき，これまで無意識的に見ようとしなかった，日本人という歴史を背負った自己が見えてきたのである。そして，日系人としての自己や 1 世の両親，特に母の感覚で捉えたアメリカ合衆国の歴史を語ることを試みる。本稿では，Yamada の作品を分析しながら，日系人の観点からこの多民族国家の20世紀史を辿り，詩の発信するメッセージを受け止めていく。

1）*Camp Notes* の時代的背景

1941年12月7日の日本軍による真珠湾攻撃は，ようやく定着しようとしていた日系人社会のその後の歴史を大きく塗りかえた。それまでヨーロッパを主要舞台とした第2次世界大戦において中立の態度を保っていたアメリカであったが，自国の領土であるハワイが日本軍からの奇襲攻撃を受け，多くのアメリカ人の死者を出したという重大な事実を受け，Franklin Roosevelt大統領は翌日日本に宣戦布告，第2次大戦の第二の局面である太平洋戦争が勃発した。日本軍による非道な奇襲攻撃で多数の自国民の命が失われたという事実は，これまでヨーロッパでの戦争も日本軍のアジア諸国侵略も対岸の火事として傍観していたアメリカ国民に大きな衝撃を与え，アメリカ国内に住む日本人への敵対感情へと発展して行く。

真珠湾攻撃から2ヶ月後，1942年2月19日，Roosevelt 大統領は，Executive Order 9066を発令する。この命令により事実上12万人もの日系人（うち3分の2はアメリカ国籍を持つ2世）が，居住地からの立ち退きと私有財産の放棄を強いられ，僻地での収容所生活を余儀なくさせられる結果となる。しかし，この行政命令は，具体的な人種集団名や立ち退き対象の地名には言及していない。あくまでも「戦争を成功裡に遂行すること」（“successful prosecution of war”）という軍事上の必要性を強調し，その上で軍事上必要であると軍が認めた地域であればそこの住人を立ち退かせ，別の地域に移住させる権限を大統領から軍部に与えるという内容である（Daniels, 46）。この Executive Order 9066発令後，のちに収容所の管理全般を司ることになる War Relocation Authority（WRA）の指揮により，「軍事上必要」とされる地域からの日系人の立ち退きが始まり，移住から苦難の半世紀を経てようやくアメリカに定住しようとしていた日本人たちのそれまでの努力は水泡と化し，成功の夢は打ち砕かれる。

19世紀末からアメリカへの移住を始めた日本人は，一時的に新大陸で働き財を築いた後日本に帰国しようと夢見ていたが，アメリカ国内特に彼らの多

くが住みついた西海岸にあるアジア人全般への排斥感情に加え，日本のアジア諸国への軍事拡張による反日感情という逆風に立ち向かううちに，その夢も費えていく。1920年代には，アメリカ国籍を持たない1世に対する土地所有が禁止され，移民も制限されるようになり，1世は，自分の世代が果たせなかった成功の夢を，アメリカ生まれの2世たちに託するようになる。アメリカの国籍を持つ2世の子供達が，アメリカで教育を受け，努力すれば，機会の国アメリカで社会的にも経済的にも認められるような地位を得ることができるだろうと考えたのである。子供達のアメリカでの成功を望む1世たちの多くは，子供達が英語を習得し，アメリカ的教育を受けることをむしろ奨励しており，子供達に日本語や日本文化を継承することにはあまり積極的ではなかった。このようにして親の期待を一身に背負いながらアメリカ社会の中で成長していった日系2世の多くは，アメリカ的な価値観を持ち，幼少期から自己を American であると意識していた。

そのようにして，アメリカ化された日系2世がまさに世に出ようとしていたころ，太平洋戦争が勃発した。そして，アメリカ国籍を持ち，自分をアメリカ人だと思っていた2世たちは，突然周囲から“Jap”と差別的に呼ばわれて戸惑う。そればかりか，アメリカ国民である彼らの保護者であるはずの政府が，法廷での審理をすることなく彼らの身柄を拘束し，憲法の保証した国民の人権を侵す結果となる。そして，捕虜や囚人と変わらない収容所での待遇は，日系人全般の民族的誇りを喪失させてしまう。

しかし，日系人は，戦後の人種差別に直面しながらも，たゆまぬ努力を重ねて生き延びた。そして，戦時中から収容の不当性を訴え続けてきた2世たちに加え，60年代のアフリカ系アメリカ人による公民権運動をはじめとする人権活動にも触発された日系3世の中に，戦争中の日系人の収容に対する疑問が起こる。70年代になると，2世の中でそれまで沈黙していた人々の間にも，収容が違憲であり，人権侵害であるという意識が高まり，政府に賠償を求める運動（Redress Movement）が起こるようになる。Roosevelt 大統領

の Executive Order 9066発令から34年目にあたる1976年（アメリカ建国200年の年）2月19日，Gerard Ford大統領は“An American Promise”という声明を発表，戦時中の日系人の収容は軍事行為の遂行が目的であったことをくり返し，過去の「悲劇」（“tragedy”）から多くを学んだ我々は，アメリカ国民の自由と正義を守るため，今後このような行為を二度とくり返すことはないと約束し，Executive Order 9066は撤回される。その後，Japanese American Citizens League（JACL）の中から生まれた Commission of Wartime Relocation and Internment of Civilians（CWRIC）を中心に，議会と法廷を通した賠償運動が展開された結果，1988年，Ronald Reagan 大統領が賠償法案に署名した。かくして，1989年，George Bush 大統領の名のもとに，太平洋戦争中の被収容者への謝罪がなされ，賠償が始まることになる。

2）*Camp Notes*の「30年」を考える

Mitsuye Yamada の *Camp Notes* は，彼女の1940年代の Minidoka 収容所での出来事に基づいて書かれており，収容以前の1世の両親と娘の作者自身のことを書いた I. My Issei Parents Twice Pioneers Now I Hear Them，中心となる収容所時代のことを題材とする II. Camp Notes，主として収容所を出た後の作者の体験に基づいた詩を集めた III. Other Poems という3つのパートから構成される。この詩集は，一般的には収容所の出来事を主たる題材とするとされるが，実際に出版されたのは，彼女の収容体験から30年以上が経過した1976年，Gerard Ford 大統領が戦時中の日系人収容の過ちを認め，二度とこのような行為をくり返さないと国民に約束した年である。詩集が世に出るまでに要した30年という年月は何を物語るのだろうか。戦後しばらくアメリカ社会には反日感情が根強く，中国系やフィリピン系のように，“‘loyal’ Asian-American writers”には早期に出版の機会が与えられた反面，日系人の作品が出版の機会に恵まれることはほとんどなかっ

た（Schweik, 1989, 227)。しかし，*Camp Notes* の出版までに30年が経過したのは，そのような社会的要因だけではない。むしろ，詩人 Mitsuye Yamada はこれらの歳月を経なければ登場しなかったと言った方がよいかもしれない。収容所を出たあとの彼女の内面の成長が，自己の体験を語る勇気を彼女に与え，彼女の詩を世に出したのである。

Camp Notes の I のタイトル "My Issei Parents Twice Pioneers Now I Hear Them" は，日本から太平洋を越えてアメリカ大陸に渡来した時と，収容所を出たあと再び無一文から生活を始めた時と，2度 "Pioneers" となった1世の両親の声が，30年以上の歳月を経た1976年の「今」始めて聴こえるということを意味している。このパートは，時間的には詩集の中の最も早期のことを題材としているが，実際に書かれたのは少なくとも収容所時代のIIよりは後のことであると考えられ，IIIよりも後に書かれたと考えることも可能であろう。収容所を出たあと，これまで意識しなかった日本人である自己に目を向けたとき，自分をこの世に送りだした両親の歴史をもっと知りたいと思い，それを後世に伝えたいと思うようになった。しかし，Yamada が両親を "Twice Pioneer" と評価し，彼らの声が実際に聴こえるようになるまでには，30年という時間がかかったのである。

アメリカの教育を受けた2世たちは，1世のイメージする自由と機会の国とは異なる，アメリカ合衆国の人種の壁という負の現実を直接体験することになったのも事実である。アメリカ人として成功してほしいと望む両親の期待を一身に背負いながら，自分達の国からは人種の壁の故に自分達は "Americans of Japanese descent" という "undesirable alien" としてしか受け入れられないという現実を，2世たちは知っていた。こうして両親の期待と現実の間で板挟みとなった2世たちは，日本語と日本文化を劣ったものとして排除することによってそのジレンマを克服しようとした（Kim, 129-130)。Mitsuye Yamada 自身も彼女のエッセイ "The Cult of the 'Perfect' Language: Censorship by Class Gender and Race" の中で認めるように，

戦前には多くの2世が，英語のみを話し，日本語を遠ざけることによって“more American”になろうとし，1世，特に英語を話さない母親から距離をおくようになっていた。

> Most Nisei who grew up before World War II will remember that the pressure to learn to speak American English “like a white person” was very great. In fact, some Nisei have deliberately resisted learning Japanese in order to be “more American.”... For us, cutting away the Japanese language from our consciousness seemed a simple way of casting our lot with the American majority.... We were embarrassed by our mothers who, it seemed, were either incapable of learning or refused to learn English. (138-39)

アメリカの教育の中で育った2世たちは，母が英語を習得できないのは努力をしないからだと考えた。言語習得の壁の向こう側に，国籍も土地所有権も与えられない差別的な状態で，アメリカで生き延びるためにこれまで日本で培ってきた多くのものを捨てなければならなかったという母たちの苦悩があったことに気づく2世はほとんどいなかった。

> Most Nisei could not understand the terror our mothers felt in being forced to reject everything familiar to them.... Most of us thought little about the racist nature of the laws aimed specifically at Asian nationals, such as the restrictions against our becoming naturalized U.S. citizens and buying land in this country.... As products of the American educational system, we Nisei believed in the Protestant work ethic: you can attain anything and get anywhere you want if you work hard enough at it. The corollary to that of course is obvious: it must be your own fault if you aren't getting anywhere. (139)

収容所での集団生活は日系アメリカ人の家族を崩壊させ，1世と2世の分離

を更に進める結果となる。2世たちのある者は軍隊に志願し，またある者は収容所の外に職を見つけ，収容所をあとにすると同時に両親のもとを去ることになる。彼らが，親たちだけでなく，アメリカ人であるはずの自分たち自身をも人種の故に差別した国家の側に非があると気づき，差別の背後に潜む母の“terror”について知りたいと思うのは，もっと先のことである。

Mitsuye Yamada もまた，Ohio 州 Cincinnati の大学に通うため，収容所を出て両親と別れる。しかし，彼女は，収容所の外のアメリカ社会であからさまな人種差別を受け，決して消すことのできない日本人としての自己の血統を意識するようになる。そして，公民権運動をはじめとする60年代70年代の人権運動の精神にも触発され，アメリカで生きていくためには，日本人としての自己をありのままに受けとめ，その実像に誇りをもつ必要があることに気づく。

収容所を出た後の Yamada は，自由とひきかえに凄まじい人種差別に曝されることになる。詩集の中心的パートである II. Camp Note の最後の詩“Cincinnati”(32-33) がそれを物語る。詩人自身をモデルとすると思われる“I”は，収容所を出て“Freedom at last”と喜んだのも束の間，未知の地でただ日本人であるという外見のみを理由に唾を吐きかけられる。だれにも知られず（“No one knew me.”）平凡な一市民として新しい土地で生活しようという彼女の慎ましい望みはこの心ない行為によって打ち砕かれ，以後，だれもが自分を“dirty Jap”というレッテルを通して意識する（“Every one knew me.”）状態で生きていかなければならない。彼女に今できることは，ハンカチで唾と涙を拭うことだけである。この詩はしばしば2編前の“The Night before Goodbye”(30) と関連づけて論じられる。“The Night before Goodbye”では，“I”が収容所を出る前夜，彼女の母が，自由を求めて自分のもとを離れて行く娘の下着を繕いながら，「我々」（“us”）に恥をもたらさぬように下着はいつもきちんと繕っておくのだよ，とつぶやく。この詩で下着を繕う母の行為と，“Cincinnati”で周囲の者か

ら唾を吐きかけられた娘がその唾を拭うのに用いるハンカチに“the bleached laced / mother-ironed”という修飾句がつけられていることを結びつけて読むと，前者の詩での親元を離れて自立していく娘に対する母の思いが，後者で描かれる現実のアメリカ社会の中で無残にも打ち砕かれてしまうという構図になる（Schweik, 1989, 232-233; Yamamoto, 212-213; Duncan, 91-93)。“The Night before Goodbye”における“us”は，直接的には自分たち家族のことを指すが，同時に日系人という人種集団全体をも示唆すると思われる。敵性人種としてアメリカ社会に出て行く娘に対して，これ以上不名誉なことをして更なる恥を日系人にもたらしてくれるなという教訓と，自分にできる最大限のことである下着の繕いが，娘の身を恥から守ることに役立ってくれたらいいという願いがこめられている。しかし，“Cincinnati”では母の謙虚な祈りは全く届くことなく，いかに身だしなみを正しくしても日本人という肉体そのものが恥をもたらしてしまうという，過酷な現実が描かれる。

ここで考えたいのは，“Cincinnati”の状況で，ただ日本人であるという外見のみを理由に唾を吐きかけられた“I”には，母が入念にアイロンをかけてくれたハンカチで唾を拭う以外の何ができたかということである。その疑問を持ちながら，これらの詩の間に配置された“Thirty Years Under”(31)に目を向けてみたい。“Thirty Years Under”は詩集の出版の年に近いころの詩であると思われるので，出所前夜の“Night”，出所直後の“Cincinnati”の後に置かれるのが妥当だろう。しかし，時間的には最後であると思われる“Thirty Years Under”が他の2編の間に割り込んでいる。この詩の前半“I had packed up / my wounds in a cast / iron box / sealed it / labeled it / do not open... / ever... // and traveled blind for thirty years”を見ると，読者は一見，“my wounds”は収容所で受けた心の傷であり，収容所を出たとき苦しみは終わったという印象を受ける。しかし，後半で黒人男性が暴力や罵倒よりも“humiliating”だと言う“being spat on

/ like a dog" が，次の "Cincinnati" で "I" の身に現実に起こることを知ることにより，読者は，"my wounds" は収容所を出たあとも続くことに気づく。Traise Yamamoto が指摘するように，日本人女性の肉体を持った "I" にとって，日本人のみが集団的に隔離されていた "race-defined space" としての収容所から出た外界は，外の多人種集団社会の中で人種と性による脆弱さを思い知らされる空間（"a space of vulnerability defined by race as well as gender"）であり，収容所から自由になってもその空間ではアジア人女性というひ弱な肉体に対する暴力の脅威に取り囲まれることになる（"freedom from the literal confines of Minidoka is circumscribed by the threat of violence to the Asian female body."）(211)。

更に注意すべきは，"Thirty Years Under" に登場する黒人である。彼は，"huge bulbous eyes" の持ち主であるというところから，おそらく大柄で精悍で，暴力に耐える体力も十分備えた人物を想像させるが，"Cincinnati" の "I" はそれと比較すると小柄で非力な肉体の持ち主のアジア人女性である。"Thirty Years Under" の詩を前に配置し，その中で圧倒的に強靱な黒人男性の姿が先行することにより，"Cincinnati" のアジア人女性の脆弱さと無力さが引き立つ。いかなる差別的行為を受けようとも，四面を敵対的な人々に囲まれて，このアジア人女性には反撃することはできず，ただじっと唾と涙を拭きながら耐えるしか術がない。また，唾を吐きかける主体が "one / hissing voice" としてしか示されないところもこの詩の興味深いところである。精悍な黒人男性への攻撃であれば，白人男性がしばしば集団で暴力を加えるというのが常識的なイメージであろうが，無抵抗のアジア人女性を攻撃することなら，加害者の人種や性に関わらず，しかも一人で唾をかけるだけで相手に十分屈辱的な効果を与えるであろう。この 2 編の詩から，詩人が長期に渡って傷を封印してきたのは，収容という不名誉な傷を負ったという事実を恥じる気持ちの故だけではなく，傷の痛みを訴え，傷を与えた相手を糾弾したくてもできない圧力が重くのしかかってきた事実が見えてくる。

多くの2世たちは，戦後，“Cincinnati”の“I”が受けるような差別を経験するが，現状を脱して将来アメリカで生き残るためには，抵抗するのではなく，まずはアメリカという国への忠誠を誓って努力することによって道を開くという道を選ぶ。Mitsuye Yamada もその例外ではなく，学歴を積んで大学教員の職に就いた。“Thirty Years Under”にあるように，戦中戦後を通して心に受け続ける傷をギブスの中に隠して封印し，人種差別の逆境の中で黙々と努力を重ね，成功の道を歩む日系2世の姿は，1960年代には“model minority”と称讃されるようになる。しかし，この評価の裏側には，当時アフリカ系アメリカ人が進めていた公民権運動に対する牽制の意図もあった（Daniels, 107-108)。このような言葉を広めた保守層は，同じマイナリティー集団の中で，国家からの援助に頼らず差別に黙って耐えて自助努力を続ける民族集団を模範として讃えることにより，差別や圧力に立ち向かい，それを容認する国家を糾弾し，法的平等を勝ち取ることにエネルギーを使う別の民族集団を劣等とみなし，後者に対しても，前者の模範に倣うことをアピールしようとしたのである。しかし，別の見方をすれば，差別に耐えているだけで抵抗しない状態を続ける限り，如何に“model”となっても差別は存在し続け，白人と平等でない“minority”という状況は変わらない。そればかりか，国家の側からみれば，国家に抵抗することなく自分で努力する人種集団は，意のままに操ることのできる都合のいい存在である。

アジア系民族がアメリカ社会においてどのようなステレオタイプとしてとらえられているかは，Yamada のエッセイ“Invisibility is an unnatural Disaster: Reflections of an Asian American woman”の中で自身の体験に基づいて述べられている。彼女の大学の授業で1974年に出版された Frank Chin や Lawson Fusao Inada らの編集によるアジア系アメリカ文学のアンソロジー *Aiieeeee! An Anthology of Asian-American Writers* の序論を講義中，一人の白人女子学生が，文章の“militant tone”に怒りを感じると口走った。この序論は，それまでアメリカで人気を博してきたアジア系ア

メリカ人の文学が，アジア系移民の社会や文化について白人の気に入るように歪曲して描いていることを批判しているのであるが，この学生に同意する者は他にもおり，彼らによると，黒人やメキシコ系，あるいはネイティヴ・アメリカンの書いたものならさほど怒りを感じないが，アジア系だと感じるというのである。そして最後にある学生が，“It made me angry. Their anger made me angry, because I didn't know the Asian Americans felt oppressed. I didn't expect their anger.” と言った。ちょうどその頃，Yamada は，大学で自分に対する人権侵害について苦情を訴えたが，そのとき上司はショックを受け，“We don't understand this: this is so uncharacteristic of her: she seemed such a nice person, so polite, so obedient, so nontroublemaking.” とコメントされた末，だれか（たぶん “those feminists”）の入れ知恵だろうと言われたのであった（8-9）。大学へ行き，職を持ち，家族を持つという選択の自由を与えられた彼女は，現状に満足し，差別的な発言を聞いても発言者には差別的な意図はないと考え，意見を述べず沈黙していた。彼女自身は沈黙のうちに “passive resistance” をしているつもりであったが，実際には周囲は彼女が抵抗していることに気づかなかった。アメリカ社会では，抵抗の意志を表示しない限り，意志を持たない “invisible” な存在として認識されてしまう（10）。物静かで波風を立てない（“nontroublemaking”）“model minority” というステレオタイプができているために，アジア系の人間の内面の怒りや抵抗は気づかれることなく，彼らが抗議の声をあげると，とりわけ女性が抗議した場合，白人は困惑するのである。

ここで再び “Thirty Years Under” と “Cincinnati” にもどってみよう。保守的なアメリカの白人にとって，“Cincinnati” で唾をかけられても抵抗せずに耐える “I” は，一種の “model minority” であるかもしれない。しかし，“Thirty Years Under” の黒人は，唾をかけられることは殴られたり罵倒されたりするよりも “humiliating” であると言う。黒人男性を攻撃す

る場合は相手が抵抗することを予想するから“beatings”や“curses”という行為を引き起こし，アジア人女性の場合は相手が抵抗しないとわかっているから唾をかけるという行為になる。この二つの詩から，“Cincinnati”の“I”はこのまま沈黙していていいのか，という疑問が導き出される。

日系人は差別に対して何故黙って耐えるだけなのかという疑問は，III. Other Poems の“To the Lady”(40-41) において，“The one in San Francisco”と表現される人物から，“Why did the Japanese Americans let / the government put them in / those camps without protest?”という形で発せられる。それに対する答として，“I”は，“should've run off to Canada / should've hijacked a plane to Algeria... should've screamed bloody murder / like Kitty Genovese”と，8通りの可能性を提示したあと，もしそのような行動に出ていたら，“YOU”はワシントンへ行って議会に訴えてくれただろうね，と想像する。この詩で言及される Kitty Genovese の殺人事件が起こったのは公民権法が制定された1964年のことである。Genovese は危険を感じて大声で叫んだにもかかわらず，それを聞きつけた人々がすぐに警察に通報しなかったために男性に殺害された。Traise Yamamoto の指摘どおり，この詩は，公民権運動のような抗議形態が一般的になった60年代の判断基準で40年代の収容に対する日系アメリカ人の反応を評価しようとした“YOU”の無知を皮肉るとともに，Genovese 事件への言及から想起される周囲の人々の“social apathy”のように，日系人の収容のときにも彼ら以外の周囲の人々が無関心であったという“collective apathy”を含蓄する (214)。詩はさらに，“law and order Executive Order 9066 / social order moral order internal order”と続き，これら“order”の圧力が“protest”する勇気を日系人から奪ってしまったことを示唆する。身体的能力に勝る男性からの圧力に抵抗できず，助けを求めて叫び声をあげてもだれにも助けてもらえなかった Genovese のように，幾重もの圧力を受けていた日系人が収容所の中から叫び声を発しても，それが外の世界からの

援助という結果に結びついたかどうかという疑念が，ここにある。叫んでも届かないばかりか，叫べば身に危険が及ぶのではないかという心理的圧迫を感じた時，人は沈黙という道を選ぶだろう。しかし，だからといって，その沈黙が正当化されるわけではなく，収容された者が何らかの行動に出ない限り，国家に自らの非を認識させることはできない。詩は，日系人収容という人権侵害を国家に許した責任は，収容されている人々に関心を示さず傍観していた“YOU”にも，声をあげなかった“I”にも，すべての人にあるのだ（“YOU let'm / I let'm / All are punished.”）としめくくる。

Yamada と同世代の日系アメリカ人2世女性作家 Yoshiko Uchida は，Utah 州 Topaz 収容所での出来事を記した *Desert Exile*（1982）の Epilogue で，60年代の公民権運動やベトナム戦争反戦運動を体験した3世から“To the Lady”と同様の質問（“Why did you let it happen?”, “Why didn't you fight for your civil rights? Why did you go without protest to the concentration camps?”）を受けたと書いている。それに対して彼女は，当時の大多数のアメリカ国民は，自国が一部の国民の人権侵害をしている事実を認識しようとはしなかったし，日系人が抵抗したところで暴力によって制圧されただろうと答える（147）。そして，何故収容体験を語る本を書いたのかと3世に訊ねられたら，“You wrote those books so it won't ever happen again.”という答えが3世の口から出るまで話し合うと言う（154）。

収容に対して何故抵抗しなかったかを弁明することは可能だし，日本人がしばしば忍耐の必要な場面で用いる「しかたがない」で過去を水に流すことも可能だろう。しかし，過去に沈黙した状態で“model minority”と評価され，社会的に安定した地位についたとしても，国家が差別を認識し，社会から人種差別がなくならない限り，過去の悲劇はくり返す。収容所をあとにした Mitsuye Yamada は，“Thirty Years Under”の黒人や“To the Lady”の“YOU”という，自分とは異なる人種の人々と接することにより，沈黙を破る勇気を得た。彼女は，デモを組織するのではなく，直接体験者と

して収容所生活の現実を振り返り，圧力を感じて言葉を発することのできなかった人々の沈黙に秘められた意義を言葉で世に伝えるという方法を選んだのである。

3）父の歴史・母の歴史

Susan Schweik は，*Camp Notes* の I の詩の中で，父の話を題材とした "A Bedtime Story"（6-7）及び "Enryo"（8-9）と，母の話を題材とした "What Your Mother Tells You"（1），"Marriage Was a Foreign Country"（3），"Homecoming"（4-5）との間の語り口の違いを指摘しながら，Yamada がこの詩集で伝えようとした歴史が如何なるものであったかを考察する。Schweik の指摘のとおり，後者の 3 編の "mother poems" が，詩人自身の母を "I" とし，母の言葉のみで最後まで語り通され娘は聞き手に徹するのに対して，前 2 編の "father poems" は，父の言葉以外に聞き手である娘（"I"）の言葉が質問や疑問の形になって入り，それが父の話の腰を折るため，日本の伝統的美徳を娘に伝えようとする父の語りは本筋を離れて "warp" してしまう（Schweik, 89, 235）。Schweik は更にこの 2 種類の詩をMichel Foucault の歴史の二分類に言及しながら分析する。Foucault の言う "total history" とは，政府が公式に発表し，政府の都合に合うように表向きの歴史を公式の歴史であり，それに対して，個々人がどう感じたかということを書き記した歴史が "general history" である。Schweik は，Yamada の "father poems" を "a single center" にまとめあげられた主流の教科書的な日本人の道徳的価値観を伝える "total history" に，母の個人的体験を語る "mother poems" を "general history" に分類する。そして，前者の詩を娘が疑問や質問で遮り，父の道徳を "warp" させてしまう一方で，後者では娘が邪魔することなく母の言葉で最後まで語らせるという Yamadaの手法から，*Camp Notes* が重点的に伝えようと試みたのは，日本人の親が親としての権威を傘にきて子供に上から教え込もうとする道徳で

もなく，日本人一般がどういう経緯でアメリカに渡り，どのような歴史をたどったかという，公式の文献に示された“total history”の伝える「中央」“center”の情報でもなく，それらの経験をした人々がどう感じ，何を思ったか，という「周辺」（“circumference”）の個々人の“general history”の方であると結論する（89, 237）。

Schweik の更に興味深い指摘は，同じ父の言葉でありながら，IIの“P.O.W.”は父の川柳を娘が忠実に英訳したものであり，ここには“A Bedtime Story”や“Enryo”のような疑問ははさまれないということである。Schweik は，この違いを，I の 2 編では，娘の行動を“acculturator”として“dominate”しようとする父が娘の拒否反応に出会っているのに対して，“P.O.W.”の父は，娘とは関わりなく，自身の収容状態のみを語っているという点にあると分析する（89, 237）。

I の“father poems”2 編と“P.O.W.”を更に比較すると，前者においては話し手の父が聞き手の娘を親として上からコントロールしようとする垂直的な構図であるのと対照的に，“P.O.W.”では，厳密には別々のキャンプに収容されていたとはいえ，父も娘も同等の被収容者であるという水平的な構図になるということである。聞き手としては口をはさまず，父の言葉の翻訳者（伝え手）に徹する“P.O.W.”での娘の役割は，むしろ I の一連の“mother poems”の聞き手（＝翻訳者，伝え手）に近い。

子供たちをアメリカ社会で成功させようという希望を持っていたとはいえ，収容前の日系人の家庭は，1 世の父を「中心」（“center”）とした伝統的な日本流の家夫長制であることが多く，「中心」である父が「周辺」（“margin”，“circumference”）であるその他の家族に対する決定権を持つ傾向にあった。そして，親も子供も同等の権利を有する個人であるというアメリカ流の平等の理念を学校で学び，それを善き価値とする 2 世世代が，日本流の垂直的な家族関係に拒否反応を示したことは自然なことであろう。加えて，アメリカの教育を受けた 2 世が，儒教や仏教を背景とする日本的な道徳や価

値観を，キリスト教を背景とするアメリカ的な価値観よりも低く評価していたことは，しばしば指摘されることである。“A Bedtime Story” の中で，山道で行き倒れになりそうな老婆がどの家にも泊めてもらえなかった代わりに野宿して素晴らしい夜空を眺めることができ，宿泊を断った人々に感謝の気持ちを持つという父の話から，苦難に耐えれば後から幸せが来るという，父の意図した教訓は伝わらず，聞き手の娘としては，おそらく，この老婆は何故努力して何とか泊めてもらおうとしなかったのか，彼女はこのあとどうなったのか，困っている彼女を助けなかった村人に何の天罰も下らないのか，というプロテスタント的正義感に基づく疑問が残り，“That's the *end*?” と叫ぶことになる (6-7)。“Enryo” では，困っていても “no / thank you / saying no / trouble at all” と言って他人に助けてもらわず自助努力する「遠慮」の美徳は娘には伝わらず，“Enryo” の音が “in leo” と似ていることから，“humility” と “lion” はどんな関係があるのだろうという，父からすれば的外れの質問を受ける(9)。

I の 2 編の詩に対して，II の “P.O.W.” の父は，“Papa” ではなく，父 Jack Yasutake の川柳のペンネーム “Jakki” であり，詩の原作者名として示される。ここでの Jakki と Mitsuye は，父と娘という家族関係を越えて，原作者と翻訳者という個人対個人の同等の立場に立つ。そして，川柳の中の “I” は，Mitsuye にとって，父である以上に，自分と同じようにアメリカ政府の支配を受ける一被収容者である。Yasutake（Mitsuye Yamada の旧姓）家では家長であった Jack も，政治権力の中枢（center）のアメリカ政府にとっては Mitsuye と同じ Jap で，同様に marginal な存在にすぎない。自己と水平の位置に並んだ父の言葉を，Yamada は，同じく marginal な存在である母の言葉と同様に，遮ることなく忠実に伝えようとするのである。

家父長制社会のように権力の上下関係に基づく垂直社会の中では，上の 2 編で示されるような謙虚な態度は，権力を持つ上位の者（center）からそれを持たない下位の者（margin）に対して示されることは現実にはほとんど

なく，しばしば上位の者が下位の者を支配する方便として使われる。夫は妻を，親は子を，そして国家は国民を，保護してやることと引換えに，各々後者は前者におとなしく謙虚に服従すべし，という理屈である。更に，その背後には，後者が従わなければ，権力を持つ前者からどんな仕打ちを受けるかわからないという無言の圧力があることを忘れてはならない。仮に“A Bedtime Story”の老女が，男性の権力者であったなら，村人たちはこぞって彼を招き入れたのではないか。自分たちと同じ marginal な存在の老女を冷遇しても，無力な彼女は何も報復できないであろうが，自分たちよりも上位で center の存在である権力者からの求めを拒絶したらどんな仕返しが待っているかもしれない。また，老女を泊めてやっても何の見返りもないが，権力者であれば，あとから何かご褒美をもらえるかもしれないという欲もはたらくだろう。多くの日系2世は，多少なりとも明治時代の日本の家夫長制的感覚を漂わせた家庭の外のアメリカ社会は，このような「遠慮」の必要のない自由平等の水平社会だと信じていた。従って，アメリカ合衆国から，その血筋ゆえの収容という運命を課されたことは，許しがたい裏切りであったはずだ。そればかりか，アメリカ政府は，彼らの国家に対する loyalty を問う質問に答えることを迫った。

1943年に17歳以上の日系人全体を対象に行われたいわゆる“loyalty questionnaires”は，日系人にとって大きな心理的圧力となった。特に混乱を引き起こした質問は，必要があればアメリカ合衆国の兵隊として戦う意志があるかという第27問と，日本の天皇への忠誠や服従を捨てるかという第28問であった。もともとこの質問は，日系2世兵士のみの部隊を編成してヨーロッパ戦線に送ることを目的に，兵士になる年令の2世男性を対象に作られたが，実際には，性別・国籍を問わず17歳以上の全ての日系人に，“Application for Leave Clearance”という名目で，質問票が配付された。収容所の管理を担っていた WRA（War Relocation Authority）とすれば，アメリカに対して忠誠心のある者は収容所を出してやろうという配慮によって被

収容者全員にこの質問を行ったのであるが，“Yes” か “No” かという二分法は日系人の間に分裂と混乱をもたらす結果となった（Daniels, 68-69)。“Yes” か “No” の二者択一の質問に “No” と答えた結果を想像した末に，恐怖に負けて不本意ながら “Yes” と答えた者も少なくない。戦時中の日系人は，年令性別を問わず，常に国家という center の支配を受け，コントロールされ，圧力に曝され，自らの意志を持つことを許されない marginal な集団になっていた。

Camp Notes の中では，II の “The Question of Loyalty” (29)がこれらの質問を取り扱っている。ここでは，日本の天皇など知らない 2 世の “I” にとって，天皇への忠誠を捨てることは容易なことであるが，1 世の母にはそんなに単純に肯定も否定もできるものではない。一般的には第28問について，アメリカ国籍を持っていない自分が日本の天皇への忠誠を捨てれば無国籍になるのではないかという危惧を抱いた 1 世が多いと言われている (Takezawa, 98)。しかし，この詩の母は，国籍のことで悩んでいるのではない。この質問への答えにより，自分が 1 世集団に対して “loyal” であるか，2 世集団に対して “loyal” であるかを選ぶ結果になると考えて動揺している（“If I sign this / What will I be? / I am doubly loyal / to my American children / also to my own people. / How can double mean nothing? / I wish no one to lose this war. / Everyone does.”)。彼女にとって，夫をはじめ 1 世は “Japanese”，子供達 2 世は “American” であるが，そのどちらも “my own people”であり，どちらか一方を選んで他方を捨てるということはできない。日本の社会の中で，だれかに “loyal”であることを教育されてきた母であるが，だれに “loyal” であるか選べと言われることは，困惑以外の何ものでもない。自らの意志を表明することを許されなかった彼女にとっては，渡米すらも自己の選択ではなく，夫や周囲の命令に従った結果である。この質問で選択を迫ることは，Minidoka 収容所へ行けという命令以上の苦痛を彼女に与えたかもしれない。心情的には “doubly

loyal" である母にとっては，アメリカが勝っても日本が勝ってもどうでもいいわけであり（"I wish no one to lose this war."），"Everyone does." からもわかるように，彼女だけではなくおそらく収容所の多くの日系人の少なくともアメリカ国籍の子をもつ1世女性が彼女と同じように動揺を感じていたのだろう。

上の loyalty questionnaires に関連して，軍が収容所を訪れて2世の志願兵を募るシーンが "Recruiting Team"（23）に登場する。一組の母娘を対比させた "The Question of Loyalty" とは対照的に，この詩では父子集団の対立が描かれる。アメリカ兵として志願しようとする2世男性集団が2人の新兵徴募兵の回りを取り囲み，その輪の更に外側を，「馬鹿野郎」と罵倒する1世男性集団の輪が囲む。息子は父に "loyal" であるべしという日本の儒教的価値観は崩れ去り，父親たちは中心を離れた外周（"outside circle"）へと追いやられてしまう。

父親の権威を失った1世の男性たちのさまは，IIの "Inside News" でも語られる。太平洋戦争の戦況を報じるラジオのニュースを聞きながら，騒々しく語り合う彼らの姿は，"the parents / with samurai morals / are now the children." と評される（21）。収容生活の中で，日本の伝統的家族関係は破壊され，一家の要であった父は権威と支配力を失う。収容所での生活は，1世と2世の分離を更に進め，日系アメリカ人の家族を崩壊させる結果となる。それまでは家族の長であった1世の父親は社会的地位も財産もすべて失い，家族への求心力を弱めていく。それに伴い，2世たちは両親を避け，英語を話す同世代の2世たちと過ごす時間が多くなる。(Takezawa, 94)。収容所においては，英語を自由に操る2世たちの発言権が大きくなり，1世たちの声は聞き入れられなくなってくる。

上の2編では共に1世男性は集団で登場し，日本流のナショナリズムを振りかざして感情的にがなりたてる。彼らの叫びは，アメリカへの忠誠を示そうとする多数派にとって，現状打開への足がかりを妨げる野蛮な雑音でしか

なく，“Recruiting Team” の “I” も，この雑音を耳に入れないように耳をふさぐ。彼女の耳に届くのは，「俺はアメリカ人なのだから志願ではなく徴兵されるべきだ」という，叫ぶ1世とはまったく対極にあるアメリカのナショナリズムの方である。もともと周辺的な存在であり，捨てるものの少なかった1世女性と比較すると，収容という運命に直面したとき，少なくとも自己の家庭内では家長（center）としての責を担っていた1世男性は，その “samurai” 気質と誇りを捨てられない分，精神的苦痛がより大きかったことであろう。父親の権威は収容所の中で失墜する。しかし，皮肉なことに，父親が一家をまとめるという日系人の家族環境の崩壊に伴い，2世たちはそれまでの親の束縛や圧力から解放され自由を得る結果となる。庇護してくれるコミュニティを失い自主独立しなければならなくなった彼らは，人種差別の前面にさらされながら，収容前に学んだアメリカの自由平等の民主主義の理念を忘れることもなかった。やがて，彼らの学んだアメリカの正義が，非白人の自分たちに対しては適用されることがないという現実を認識し，彼らが忌み嫌った支配従属関係を，親たちに代わって国家たるアメリカによって強いられたという皮肉な現実に気づくようになる。

4）沈黙の回復

Patti Duncan は，I の “father poems” と “mother poems” に関する Schweik の指摘に加え，*Camp Notes* の中で “total history” である前者は父親の言葉として“‘perfect’ English” で語られ，“general history” である後者は主として “‘broken’ English” で語られることを指摘する（82-83）。また，2世にとって，I の “Marriage Was a Foreign Country” と “Dialogue”（10）に登場する男性（“husband / father”）はアメリカという “fatherland” を，女性（“wife / mother”）は日本語という “mother tongue” を象徴すると述べる（85）。

Camp Notes 全般を通して，1世夫婦の会話は登場しない。I の最後の詩

“Dialogue” には，１世夫婦らしい人物が登場するが，ここでの “Dialogue” は夫婦間のものではなく，夫（“you”）と，この夫婦の娘であろうと考えられる “I” が，20年の結婚生活の後に夫のもとを去ろうとする妻（“she”）のことを話題にする会話である。“I” は “you” に “she” の話を聞けと言うが，夫は，聞いても妻は黙っている（“dumb”）からわからないと言う。この詩に象徴されるように，アメリカという国家が聞いてきたのは，夫（父）の話す “‘perfect’ English” であり，妻（母）の話す “‘broken’ English” は，聞いてもらえないか，沈黙させられてきた。Yamada が伝えようとしたのは，聞かれなかった “mother tongue” 即ち意志を持つことを許されず，ただ周囲の目上の者の命令どおりに従わざるを得なかった母の言葉であり，それをできるだけ母自身の発する言葉に忠実に再現しようと試みる。

Ｉの冒頭の詩 “What Your Mother Tells You” は，遠い昔，まだ娘の Mitsuye が母の言葉を聞こうとしなかった頃に母が言った言葉を再現している。母の予言は適中し，数々の体験を経て自らも母となった娘は，母の内面がようやく「分かる」（“know”）ようになる。「其の内に」（“in time”）という表現は，また，母の発言と，その発言を再現した詩との間に流れる歳月を感じさせる。この短い詩では，発言者である母の姿の陰に，アメリカに同化する努力をしないように見えた母の言葉に積極的に耳を傾けない若き日の Mitsuye Yasutake の姿があり，更にその姿には，その後，母の発言を書きとどめる中年の詩人 Mitsuye Yamada の姿がだぶらされる。この詩は，まず母の母国語である日本語テキスト，次に日本語のアルファベット表記，最後に英語訳テキストと，３通りの言語表現で語られる。Ｉの中では，“Marriage Was a Foreign Country” と “Homecoming” も同様に母の言葉をうつした詩と思われるが，これらの詩もほんとうは冒頭の詩と同様３通りの表記をすることが Yamada の理想だったのではないかと思われる。彼女が，これらの詩を書くにあたり，母の言葉をできるだけオリジナルに忠実な形で世に伝えたいと思ったが，母に体験を語らせるということが至難の技

であったということは，彼女のエッセイ “The Cult of the ‘Perfect’ Language” に書かれている。日本語をそのまま書き写しただけでは，日本語には馴染みのない若い世代には伝わらないが，完全に英訳したのでは母の原体験のインパクトが薄くなる。そこで，Yamada は，母が話す broken English をそのまま書き写そうと試みるが，母は自分の英語は正しい英語ではないから恥ずかしいと言ってなかなか同意しなかったという（130-133）。日本では地方出身の女とさげすまれ，アメリカでは敵性人種というレッテルを貼られ，周辺に追いやられ続けた母にとって，自分の言葉が “real voice” として世に出ることなど自分の “ignorance” を世に曝すだけのことだと不快感を示す（131）。しかし，Yamada が伝えようとしたのはまさに母のように，無知無学を理由に声をあげることも許されず，運命に翻弄され沈黙させられた者たちの生の声（“real voice”）であった。

“Marriage Was a Foreign Country” で Yamada の母と思われる “I” は，自分が渡米した時のことを語る。多くの１世女性と同様に，彼女は自分の意志には関わりなく，周囲の者（“they”）の命令に従い，夫について行った（“I come to be here / because / they say I must / follow m husband // so I come.)。母に命令をした主体が “they” であり，具体的に示されないことが象徴するように，その主体が親でも夫でも日本でもアメリカでも違いはなく，母は命令や指示どおりに動くだけの人生をたどってきた。そして彼女の乗ってきた船は，彼女と同様の環境で同様の人生をたどる女性たちでいっぱいになっている。彼女達の多くは “new brides” であるが，愛し合う男女の前途を祝福する一般的結婚のイメージはここにはない。タイトルが語る通り，彼女たちにとって“Marriage” とは，夫という個人との共同生活を意味する以上に，アメリカ合衆国という “Foreign Country” に移住することを意味する。船の女性たちと港で迎える男性たちは互いに自分の持っている写真と照合しながら，配偶者を探している。母にとって唯一の救いは，彼女がいわゆる “picture bride”——アメリカにいる男性と日本にいる女性の

結婚が互いに面識もないまま写真をもとに周囲によって決められ，日本での代理結婚のあと女性が渡米するという方式で結婚をした花嫁――ではなく，夫とは一応の面識があったということだろう。しかし，彼女は，他の女性達と同様 “afraid” であった。“I was not a picture bride / I only was afraid.” という表現は，一見大して怯えていないように見えるが，次の詩 “Homecoming” で “scratch out lies / lie buried inside / the house all the time / sorrows my night / cries still survive.” と始まる母の言葉と，それに続く 2 編の “father poems” を読むと，“I was only afraid.” は “Enryo” であり，“no / trouble at all.” であるかのようなみせかけ（“disguise”）の背後には測り知れない恐怖が隠されていることが感じられる。

“Homecoming” は，35年の結婚生活の後，夫に先立たれた母（“I”）が，夫の生前ずっと隠してきた “cries” を 2 世の娘に語りかける言葉である。この詩にも “Marriage Was a Foreign Country” と同様，“Papa say go home / to your mother in Japan” という父から母への命令があり，母はその命令に従ってまだ幼い息子たちをアメリカに残して日本で娘（“you”）を出産し，その後今度は赤ん坊を残して自分だけアメリカに渡り，その後娘をひきとったという話が語られる。しかし，この詩は前の詩と異なり，表向きの出来事だけを語るのではなく，“I cry alone / no sleep for me.”, “together we cry / there was no one else.”, “nothing else to do.”, “at home I have two sons / your father and no help / no night nurse I / stay up with you / whine after me / when I leave.” など，そのときには我慢し「遠慮」して封印していた事実や感情，押し殺していた本音を表出する点である。日系アメリカ人として差別され抑圧された30年を経た今，Yamada にはこれら母の本音が魂の叫びとして届く。

母の言葉と同様の女性の小さな声または沈黙は，II. Camp Notes にしばしばあらわれる。“Block 4 Barrack 4 ‘Apt’ C” (19) で，夫が碁を打って

いる間ひとりですすり泣く妊婦の声，“Mess Hall Discipline”（28）で食べ物をこぼして母につねられた娘の“soundless cry”，“The Night before Goodbye”の母親の囁き（“she whispers”），そして“Cincinnati”の“I”の沈黙などである。いずれの場合も，夫，母親，番兵，白人という，自分よりも権威のある圧力が背後に存在し，大声を出すことができない。同時に，このパートには男性的な大きな声・はっきりした声も登場する。男性的な声は，上述の“Inside News”と“Recruiting Team”の1世男性の怒号の他に，“Evacuation”（13）の“photographer”の“Smile!”や“Curfew”（16）の“warden”の“Turn off your lights / it's curfew time!”，“Off with your lights. / There must be no light.”など，上から下への命令調の言葉が挙げられる。これらの声は，総じて敵対的・威圧的である。“Evacuation”，“Curfew”，“Recruiting Team”には，大声と沈黙が同居する。“Evacuation”では，“Smile!”という命令と共に，不本意ながらも命令に従って“Smile”せざるをえない無力な“I”の沈黙が描かれる。“Curfew”では，消灯時間を過ぎても命令に背いて黙って隠れて本を読む“I”の姿があるが，監視員に見つかってしまう。“Recruiting Team”には，1世たちの怒号に対して，無言のまま両手で耳をふさいで音を遮断し，走り去る“I”の姿がある。大声とそれに反応する沈黙を同居させることにより，大声を出す者が沈黙する者へ与える圧力を効果的に描いている。“Mess Hall Discipline”では，母親につねられる娘の沈黙と同様に，つねる母の“smiling mouth”にも目を向ける必要があろう。娘の苦痛や自分の暴力的行為から他人の目をそらそうとする母親の微笑は，強いられた不本意な微笑であるという点では“Evacuation”の微笑と共通する。しかし，後者の微笑が，支配者である国家権力側から被支配者に対して外的に強いられたものであるのに対し，前者の微笑は，被支配者である母親の内面が意図して自身に強いたものであり，しかも元来娘を保護する立場にある母が娘に加えている迫害や圧力を同じ被支配者である日系人から隠す目的にこの微笑を利用しているという点が無気

味である。

本稿では，*Camp Notes* が母の言葉を伝える詩だということをくり返してきた。また，この詩集が虐げられた女性の言葉を伝えるフェミニズム的な作品であるということは一般的解釈である。しかし，その全体的な語り口を見てみると，決して女性的であるとはいえない。同じ 2 世女流作家 Hisaye Yamamoto の短編小説や Wakako Yamauchi の戯曲が，情景描写を提示しながら言外に登場人物の心情を暗示する示唆に富む俳句的効果を持つのと対照的に，Yamada の詩は，公に発表された事実の舞台裏を暴露し，隠された事実を明るみに出しながら，一般的な認識に挑戦するという皮肉と諷刺に富んだ辛口の川柳に近い効果を持つといえる。“Evacuation” では，“Note smiling faces / a lesson to Tokyo.” という見出しで，日系人が立ち退きを喜んでいるかのように伝える新聞報道には，実は被写体に命じてむりやり微笑ませているというやらせの舞台裏を見せる。“Desert Storm” (20) では “This was not / im / prison / ment. / This was / re / location” とわざと単語を分割表記して読者の目をひき，立ち退きや収容について政府が公式に用いる用語が，過酷な現実に蓋をするための美辞麗句であることを諷刺する。父の逮捕について書いた “On the Bus” (14) では，“What was the charge? / Possible espionage or / impossible espionage. / I forgot which.” という表現が，逮捕の理由が娘にもわからないほど不明瞭であったことを物語る。“The Trick Was” (26) では，収容所内での忙しい毎日のことを描きながら “(one hundred thirty-three colleges / in the whole United States in the back / of my Webster dictionary / answered: no admittance / THEY were afraid of ME)” という部分を挿入し，収容所内では “teacher” “nurse” “typist” など仕事はたくさんあるのに，外の世界では，自分が日系であるという理由で怖れられて大学にも入れてもらえないという皮肉な現実を描く。Yamada 自身，母から川柳は無骨な男が作るもので，女はもっと上品な俳句を作るべきだと言われながらも，父の主催す

る川柳の会に出ている女性に憧れたと述べている（“The Cult of the ‘Perfect’ Language”, 135-137)。内容的には母の語る歴史に共感を抱きながらも父の表現法を採用し，「女性的」な題材を「男性的」な表現で料理することにより，Yamada は両親から授かった財産を継承している。そして，母と同様に抑圧された周辺の者の心を情緒的に揺さぶるだけではなく，当然正しいとされる歴史の真実を裏側から皮肉ることにより，抑圧を与える中心にいる者の神経をも刺激するのである。

最後に，*Camp Notes* が，Mitsuye Yamada 自身を含め日系人全体の単純な過去の被害者意識のみに基づいたものではなく，被害者側の未来への責務という点にも目を向けているという点を指摘しておきたい。先に “Thirty Years Under” や “To the Lady” で見たように，収容所を出た Yamada は，アメリカという人種のるつぼの中で様々な人種の人々と接し，様々な意見を聞き，その中から圧力や差別に耐えて努力するだけでは未来は開けないことを実感する。そして，自分が日本人の血統を持つという変更も無視もできない現実を直視した上で，自分の人種集団に対する抑圧を訴える詩を書いていった。しかし，彼女が子供のころのことを描いたIIIの “Here”（42）と “There”（43）で示されるように，彼女はアメリカ（Here）ではアジア人であると認識され，日本（There）に行っても「アメリカのおじょうさん」と認識され，どちらの国においても自国の民とはみなされない。実際に両国での生活を経験した Yamada は，その厳しい現実を知っている。*Camp Notes* の最後の詩 “Mirror Mirror”（56）で Yamada は，息子の Kai から同じような疎外感を打ち明けられる（“Trouble is I’m American on the inside / and oriental on the outside”)。息子の悩みに対する母の答は，“THIS is what American looks like.” である。“American” とは，ある特定の人種を指すのではない。どんな外見をしていても，この国に住む者は “American” であり，憲法の保障する権利を有する。日系アメリカ人がたどった歴史の悲劇をくり返さないように，物理的な “Mirror” に映る外見が

“oriental” だからといって，そのステレオタイプに自分を適合させるのではなく，“oriental” である祖先が語り継ぐ歴史に耳を傾けながら，彼らのアメリカでの苦難と努力の生きざまを誇りと感じればいい。ステレオタイプの呪縛を解かれたあるがままの自己と向き合う時，誇り高い “American” としての自己の像が見えるのである。母の詩集を通して語られた祖父母の言葉が，3世4世の世代に確実に引き継がれ，彼らの未来が切り開かれていってほしいという願いが，最後の詩にこめられている。

参考文献

Chin, Frank, et al., eds. *Aiiieeeee! An Anthology of Asian-American Writers.* Washington D.C.: Howard University Press, 1974.

Daniels, Roger. *Prisoners without Trial: Japanese Americans in World War II.* 1993. New York: Hill and Wang, 2004.

Duncan, Patti. *Tell This Silence: Asian American Women Writers and the Politics of Speech.* Iowa City: University of Iowa Press, 2004.

Kim, Elaine H. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings an Their Social Context.* Philadelphia: Temple University Press, 1982.

Schweik, Susan. *A Gulf So Deeply Cut: American Women Poets and the Second World War.* Madison: The University of Wisconsin Press, 1991.

———. “A Needle with Mama’s Voice: Mitsuye Yamada’s *Camp Notes* and the American Canon of War Poetry.” *Arms and the Woman: War, Gender, and Literary Representation.* Eds. Helen M. Cooper, et al. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1989. 225-243.

Takezawa, Yasuko I. *Breaking the Silence: Redress and Japanese American Ethnicity.* 1995. Ithaca: Coronell University Press, 1996.

Yamada, Mitsuye. *Camp Notes and Other Poems.* 1976. *Camp Notes and Other Writings.* New Brunswick: Rutgers University Press, 1998.

———. “The Cult of the ‘Perfect’ Language; Censorship by Class Gender and Race.” *Sowing Ti Leaves: Writings by Multicultural Women.* Eds. Mitsuye Yamada and Sarie Sachie Hylkema. 1990.

Reprint. Irvine: MCWW Press, 1991. 127-146.

———. "Invisibility Is an Unnatural Disaster: Reflections of an Asian American Woman." 1981. *3 Asian American Writers Speaks out on Feminism.* Mitsuye Yamada, Merle Woo, and Nellie Wong. Seattle: Radical Women publications, 2003. 8-15.

Yamamoto, Traise. *Masking Selves, Making Subjects: Japanese American Women, Identity, and the Body.* Berkeley: University of California Press, 1999.

Yogi, Stan. "Japanese American Literature." *An Interethnic Companion to Asian American Literature.* Ed. King-Kok Cheung. Cambridge University Press. 1997. 125-155.